平成２５年度研究成果報告書《平成 25 年度教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	４４	都道府県・指定都市名	大分県
学校名（児童数）	佐伯市立渡町台小学校（６６９人）		

（本研究に係る問い合わせ先）
所在地：大分県佐伯市長島町３丁目 16 番１号
電話番号：0972－23－6318
研究内容等を掲載しているウェブサイトのURL：http://syou.oita-ed.jp/saiki/tomatidai/

【研究成果のポイント】

○研究課題番号：２小学校
○研究対象教科等：総合的な学習の時間
○研究のキーワード：「付けたい力」の明確化，探究的な学習単元の構想，
思考ツールの効果的な活用，協同的な学習の展開，「その都度評価」の実施
○研究成果のポイント：
探究的な学習のプロセス（以下「探究プロセス」）を踏まえた単元構成の充実を図るとともに，整理・分析段階における「付けたい力」を具体化し，その力を育むために探究プロセスや発達段階に応じた思考ツールの種類及び活用法を工夫することで，児童の思考力・判断力等の向上をめざした。

【研究の目的，研究内容】

（１）研究主題

子どもたちの主体的な学びを実現する総合的な学習の時間の工夫
～整理・分析の段階での指導方法の工夫による思考力・判断力等の育成を目指して～

（２）研究主題設定の理由

全国学力・学習状況調査の結果からも明らかなように，本校の児童は基礎的・基本的な知識及び技能の活用に大きな課題がある。その要因として，授業において，教師が教える傾向が強く，児童が主体的に学ぶ学習活動に構築できていないという指導側の課題がある。

そこで，本校では「学習」を「学」と「習」に分け，「学」は児童の主体的な「学び」，「習」は教師から「習うこと」と捉え，主として「学」で「思考力・判断力・表現力等の育成」を，「習」で「基礎的・基本的な知識，技能の確実な習得」をそれぞれ中心的に図る場として捉え，実践研究を進めてきた。

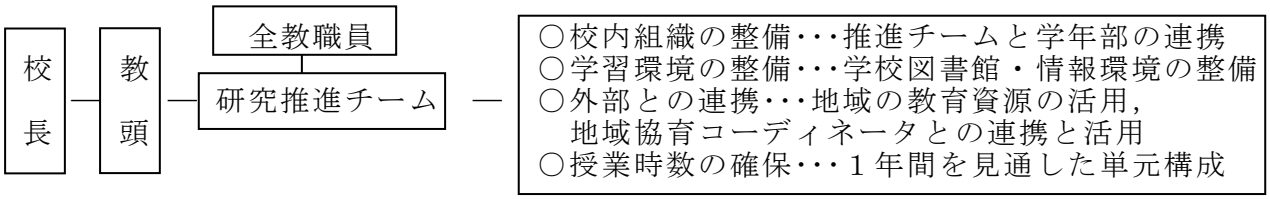
特に，総合的な学習の時間は，各教科等で学んだことを生かしながら，児童が主体的に課題解決に向かう「学」の重要な場として位置付け，平成 24 年度から探究的プロセスにより実現するよう，実践に取り組み始めた。しかし，探究プロセスについての理解，思考ツールの効果的な活用及び発達段階に応じた扱い方の整理，児童の思考力・判断力等の成長を測る評価の在り方等，まだまだ実践上の課題は多い。

そこで，これらについての具体的な実践研究を一層積み重ねることで学校としてのベクトルをそろえた取り組みを充実させ，教職員の単元構想力，授業実践力を高めることにより，児童の思考力・判断力・表現力等の育成を図ることができると考えている。

以上のようなことから，上記研究主題を設定した。

（３）研究体制

＜校内研修等の充実を図るために＞



（４）１年間の主な取組の経過

平成25年度	○　４～５月　　研究の方向性の共通理解のための基礎学習会と研究計画の作成 具体的なプランづくり（年間１～２プラン，これまでの実践経験により各自選択） フィールドワーク研修等 ○　６～７月　　実践期間１（７月８日　田村調査官を招聘しての授業研究会） 児童・教職員の意識調査１ ○　７～８月　　検証・全体計画及び年間指導計画（学級毎）の修正

平成25年度	単元プランの新規作成（年間２プラン実施者）　※20、50時間程度の２単元 単元プランの見直しと修正（年間１プラン実施者）※70時間で１単元 ○　９～１月　　実践期間２ 全学級で実施（学級カリキュラム・仮説の検証・思考ツールの活用等） 11月28日　大分県小学校教育研究会総合的な学習の時間部会秋季研修会の実施 １月21日　田村調査官を招聘しての授業研究会（授業公開） ○　２～３月　　検証・総括（次年度に向けた全体計画及び年間指導計画の修正） 児童・教職員の意識調査２の実施（児童・教職員の意識変化を確認） 研究のまとめ（全体計画・年間指導計画の見直し・実践ハンドブック作成

（５）具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

①　探究プロセスを踏まえた活動計画の立案

探究プロセスについて共通理解する研修を実施し，単元全体の中に２～４の探究プロセスを繰り返すことで、スパイラルな展開にしていくことを確認した。単元構成に当たっては，児童の興味関心と教職員の持ち味や願いを踏まえ立案することや，校区フィールドワーク研修を実施して，渡町台校区の人・もの・ことを活かした活動計画を構成するよう留意した。また，実施状況に応じて，夏季休業中に計画の見直しを図っていった。

②　「付けたい力」の明確化・意識化による評価の工夫

学校として総合的な学習の時間を通して児童に「付けたい力」を明確に示した。特に，整理・分析段階における「付けたい力」の育成に重点を置いた実践を意識した。そのために，思考力・判断力・表現力等をより具体的な言葉で示し，学習活動の中での児童の姿に対応してその場で言葉かけをしていく「その都度評価」を行うことで，児童の意欲を喚起するよう心がけていった。

③　思考ツールやICTを効果的に活用した整理･分析による思考力・判断力等の育成

思考ツール活用研修を繰り返し実施し，実践の中で「付けたい力」に応じた適切な思考ツールを使うよう留意していった。そうすることで，教師・児童がともに思考ツールのよさを実感し，活動の意図や目的に応じた活用ができることを目指した。実践を重ねることによって，発達段階や探究プロセスに応じた思考ツールの効果的な活用について，少しずつ明らかにすることができた。

また，思考ツールの汎用性の観点からも，他教科等でも活用する姿が見られるようになり，広がりを感じている。

【研究成果とその意義等】

（１）研究成果

児童の興味･関心及び教職員の持ち味や願いを生かしながら,探究プロセスを踏まえた単元構成へと改善し充実させることができた。また，整理・分析段階の指導方法を工夫することにより，発達段階や探究プロセスに応じた思考ツールの活用の在り方を少しずつ明らかにしていくことができた。また，これまでの実践と研究を集積した授業公開の実施や本校独自の実践ハンドブック（基礎・実践・Q&A 全３編）の作成により研究内容を県内の学校に広げることができた。

（２）研究成果の意義等

本研究により，思考ツールを効果的に活用することが，児童の思考力・判断力等を育むために有効であることを確認することができた。また，その際には，発達の段階や探究プロセスの各段階のねらいに留意することが重要であることもわかってきた。さらには，総合的な学習の時間にとどまらず，各教科等においても思考ツールを有効に活用することによって，教育活動全体の中で思考力・判断力等の育成を図っていくことの重要性も再確認できた。

（３）指定期間終了後の取組

「付けたい力」の明確化，探究プロセスの構成，思考力・判断力等を育むための思考ツールの効果的な活用等について実践を通して明らかにしてきたが，まだ実践は緒についたばかりである。今後も実践を継続していくことにより，児童の具体的な姿でその効果を明らかにしていかなければならない。また，国語科の「話す・聞く，読む，書く」各領域における「単元を貫く言語活動」との関連については実践不足であり，どのような関連のさせ方や単元構成の仕方が適切であるのかについても取り組んでいく必要性を感じている。

いずれにしても，今年度の成果と課題を踏まえ，研究をさらに深化させていくことにより，これからの社会を生きる児童に，しっかりとした力を育む研究を継続させていきたい。